

1980年8月24日 鎌倉雪ノ下教会 主日礼拝

説教者：加藤さゆり先生

説教題：主の任命

聖書箇所：エゼキエル書第2章1―7節、使徒行伝第26章1―18節

5 聖書：口語訳聖書

さゆり先生：(招詞 詩篇 第96篇1―6節)

- 1 新しい歌を主にむかってうたえ。全地よ、主にむかってうたえ。
- 10 2 主にむかって歌い、そのみ名をほめよ。日ごとにその救を宣べ伝えよ。
3 もろもろの国の中にその栄光をあらわし、もろもろの民の中にそのくすしみわざをあらわせ。
4 主は大いなる神であって、いともほめたたうべきもの、もろもろの神にまさって恐るべき者である。
- 15 5 もろもろの民のすべての神はむなしい。しかし主はもろもろの天を造られた。
6 誉と、威厳とはそのみ前にあり、力と、うるわしさとはその聖所にある。
7 もろもろの民のやからよ、主に帰せよ、栄光と力とを主に帰せよ。
8 そのみ名にふさわしい栄光を主に帰せよ。供え物を携えてその大庭にきたれ。
9 聖なる装いをして主を拝め、全地よ、そのみ前におののけ。

20

さゆり先生：讚美歌の24番

さゆり先生：聖書を読みます。旧約聖書、エゼキエル書第2章1節より。旧約聖書の1151ページ。エゼキエル書第2章。

25

- 1 彼はわたしに言われた、「人の子よ、立ちあがれ、わたしはあなたに語ろう」。
- 2 そして彼がわたしに語られた時、霊がわたしのうちに入り、わたしを立ちあがらせた。そして彼のわたしに語られるのを聞いた。
- 3 彼はわたしに言われた、「人の子よ、わたしはあなたをイスラエルの民、すなわちわたしにそむいた反逆の民につかわす。彼らもその先祖も、わたしにそむいて今日に及んでいる。
- 30 4 彼らは厚顔で強情な者たちである。わたしはあなたを彼らにつかわす。あなたは彼らに『主なる神はこう言われる』と言いなさい。
5 彼らは聞いても、拒んでも、(彼らは反逆の家だから) 彼らの中に預言者がいたことを知るだろう。
- 35 6 人の子よ、彼らを恐れてはならない。彼らの言葉をも恐れてはならない。たといあざみといばらがあなたと一緒にあっても、またあなたが、さそりの中に住んでも、彼らの言葉を恐れてはならない。彼らの顔をはばかりてはならない。彼らは反逆の家である。
7 彼らが聞いても、拒んでも、あなたはただわたしの言葉を彼らに語らなければならない。彼らは反逆の家だから。

40

さゆり先生：新約聖書、使徒行伝第26章。使徒行伝第26章。新約聖書の227ページ。
26章の1節から読みます。

- 1 アグリッパはパウロに、「おまえ自身のことを話してもよい」と言った。そこでパウロは、
45 手をさし伸べて、弁明をし始めた。
- 2 「アグリッパ王よ、ユダヤ人たちから訴えられているすべての事に関して、きょう、あ
なたの前で弁明することになったのは、わたしのしあわせに思うところであります。
- 3 あなたは、ユダヤ人のあらゆる慣例や問題を、よく知り抜いておられるかたですから、
わたしの申すことを、寛大なお心で聞いていただきたいのです。
- 50 4 さて、わたしは若い時代には、初めから自国民の中で、またエルサレムで過ごしたの
ですが、そのころのわたしの生活ぶりは、ユダヤ人がみんなよく知っているところです。
- 5 彼らはわたしを初めから知っているのです、証言しようと思えばできるのですが、わたし
は、わたしたちの宗教の最も厳格な派にしたがって、パリサイ人としての生活をしていた
のです。
- 55 6 今わたしは、神がわたしたちの先祖に約束なさった希望をいただいているために、裁判を
受けているのであります。
- 7 わたしたちの十二の部族は、夜昼、熱心に神に仕えて、その約束を得ようと望んでいる
のです。王よ、この希望のために、わたしはユダヤ人から訴えられています。
- 8 神が死人をよみがえらせるということが、あなたがたには、どうして信じられないこと
60 と思えるのでしょうか。
- 9 わたし自身も、以前には、ナザレ人イエスの名に逆らって反対の行動をすべきだと、思
っていました。
- 10 そしてわたしは、それをエルサレムで敢行し、祭司長たちから権限を与えられて、多く
の聖徒たちを獄に閉じ込め、彼らが殺される時には、それに賛成の意を表しました。
- 65 11 それから、いたるところの会堂で、しばしば彼らを罰して、無理やりに神をけがす言葉
を言わせようとし、彼らに対してひどく荒れ狂い、ついに外国の町々にまで、迫害の手を
のばすに至りました。
- 12 こうして、わたしは、祭司長たちから権限と委任とを受けて、ダマスコに行ったので
すが、
- 70 13 王よ、その途中、真昼に、光が天からさして来るのを見ました。それは、太陽よりも、
もっと光り輝いて、わたしと同行者たちとをめぐり照しました。
- 14 わたしたちはみな地に倒れましたが、その時へブル語でわたしにこう呼びかける声を聞
きました、『サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。とげのあるむちをければ、傷を
負うだけである』。
- 75 15 そこで、わたしが『主よ、あなたはどなたですか』と尋ねると、主は言われた、『わた
しは、あなたが迫害しているイエスである。
- 16 さあ、起きあがって、自分の足で立ちなさい。わたしがあなたに現れたのは、あなたが
わたしに会った事と、あなたに現れて示そうとしている事とをあかしし、これを伝える務
に、あなたを任じるためである。
- 80 17 わたしは、この国民と異邦人との中から、あなたを救い出し、あらためてあなたを彼ら

につかわすが、

18 それは、彼らの目を開き、彼らをやみから光へ、悪魔の支配から神のみもとへ帰らせ、また、彼らが罪のゆるしを得、わたしを信じる信仰によって、聖別された人々に加わるためである』。

85

さゆり先生：お祈りをいたします。

ご在天の父なる神様。今ここに、こうしてあなたを礼拝する群れを、あなたご自身が招き、ここに形造ってくださいましたことを、心から感謝をいたします。

90 聖日より始まりました、ひと回りの旅路を終えて、再び私どもがここに帰って来ることができました。しかしその僅かな歩みもまた、繰り返し、まことに罪の多い、汚れに満ちたものであったことを、今、み前にあつて深く畏れる者でございます。

しかし、そのような私たちに、聖書は私たちのために、大祭司なる主イエス・キリストがおられ、主イエスは、私どものこのような弱さを、このような惨めさを、思いやること
95 のできるお方であることを、明らかに語ってくださりました。そしてそのことのゆえに、私たちが大胆に、あなたのみ前に出（いず）ることができ、あなたの恵みと憐みとを受け
るために、恵みのみ座にかく近づいてくることが許されておりますことを、まことに深い
恵みと、心から感謝いたします。

100 どうぞ私ども一人ひとりの心の中にあなたが促してくださいます、まことの悔い改め
の心を、あなたによって砕かれた魂をもって、あなたのみ前に立つことを得させてください。そのような私たち一人ひとりを、あなたは傷付いた葦を折ることなく、ほの暗き灯心を消すことなく、み手によって支え、導き、生かしてきてくださいましたことを、心から感謝し、あなたのみ名を賛美いたします。

105 今、あなたが招きの言葉をもって聞かせてくださいましたように、どうか私たちの生活
が、朝に、夕に、悲しみの中にあつても、嘆きの中にあつても、絶えざる新しき賛美の歌を、あなたに向かって歌い続ける生活であることができますように。私たちの小さな旅路が、どうぞあなたに対する新しい歌を歌い続ける旅路であることができますように、み手をもって導いてくださいますように、心からお願いをいたします。

110 私どもが住んでおります世界は、人間の力が、人間の権力が力をふるい、弱い者や小さい者が痛められ、傷つけられる世界です。あなたが、あの折れそうな葦を、消えそうな灯心を保ち、生かしてくださいますように、どうか私たち人間の世界の中にもそのような思いを与えてくださいますように。正義と愛が支配する、そうした世界になることができますように、力を与えてください。

115 信仰のゆえに、迫害を受けております隣国の兄弟たちを、どうかあなたが勇気づけ、力を与えてくださいますように。そして世界の中にひとりでも多くのものがあなたに向かって心を向けることができますように。そのことのために、全世界にあります教会をあなたが用いてください。この教会をあなたが建ててくださいますように。心からお願いをいたします。

120 私たちの群れの中にあつて旅に出ております者、また遠い国々で信仰の生活を守り、また与えられた使命に生きております者たちをあなたが祝してください。不順な天候の中で

病床にあります者、またその病床に仕えております一人ひとりの家族を、どうぞあなたが顧みてくださいますように。心の中にさまざまな重荷を、戦いを負っております者をあなたが招いてください。信仰を求めております者の心に、どうぞ、主イエス・キリストのお姿を、あなたご自身が明らかにお示しくくださいますようお願いをいたします。どうぞこの礼拝をはじめから終わりまで、あなたの御霊が豊かに導いてくださいますように、心からお願いをいたします。

これらの願いを主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン

さゆり先生：献金をいたします。

130

——献金——

信徒：祈り

135 会衆：主の祈り

さゆり先生：讚美歌の第二編の58番。

さゆり先生：(説教)

140

私たちはこのようにひとつの教会に集められて、ひとつの礼拝を守っておりますけれども、必ずしも、お互いにそれぞれがどんな道をたどって信仰を与えられたかということについては、必ずしもお互いに十分良く知り合っているということではないと思います。ときどき地区集会などで、そうしたお話をうかがう機会がありますけれども、それもその人が歩んで来た長い人生から見れば、ごく一部分に限られたことであるように思います。

145

ただ今、私どもがご一緒に読もうとしておりますこの使徒行伝の第26章は、今お読みいたしましたように、あの使徒パウロのまことに劇的な回心の物語であります。しかし大変興味がありますことに、パウロ自身は、自分のそうした回心の出来事について触れることは、まことに驚くべく少ないと言って良いと思います。ガラテヤ人への手紙だとか、ピリピ人への手紙などにその一部を見ることが出来ますけれども、今私どもが読みましたような形で、自分の回心をパウロが語っているというところはございません。そしてこの使徒行伝というのは、ご承知の通りに、ルカによる福音書を書きましたあのルカの筆になるものです。そしてこの使徒行伝の中にはこのルカによって3回にわたって、このパウロの回心の出来事が、回心の物語が書かれております。9章、22章、そして今日の26章と3回、ルカはパウロの回心を書いております。しかしそれぞれを読み比べてみますと、ルカは、そのパウロが置かれております状況だとか、あるいはパウロが語りかけます相手によって、多少の違いをこのルカは書きながら、しかし大筋においてはこのパウロの回心の出来事を、今申しましたようにルカが3回も書いているということ、私たちは使徒行伝で読みながら、しかしさっき触れましたようにパウロ自身は、そのことに触れることは非

160

常に少なかったということを心に留めながら、この出来事をご一緒に読んでまいりたいと思います。

26章の9節から読んでまいります。

165 わたし自身も、以前には、ナザレ人イエスの名に逆らって反対の行動をすべきだと、
思っていました。

とパウロは言っています。信仰を与えられる前のパウロは、「わたし自身も」と書いてお
りますけれども、これはもう少しもとの言葉ですと「私は、私自身」「この私は私自身」とい
170 うように、「私」という言葉が大変強調されておりまして、「この私は私自身、こうすべき
だと考えていました」。そして、どうすべきであると考えていたかと言うと、「ナザレ人イ
エスの名に逆らって反対の行動をすべきだと、私は、私自身考えていた」とパウロは言っ
ています。そしてある人は「私は、私自身、自分の思い込みで」というように意識をして
おられるほどに、ここでパウロが考えていたことは、パウロ自身が、自分はこうすべきこ
175 とであると考えていたことだ、ということだと思えます。

パウロ自身、5節のところにありますように、「わたしたちの宗教の最も厳格な派にした
がって、パリサイ人としての生活をしていた」とパウロが言っていますけれども、パウロ
自身、まことに熱心なパリサイ人でありました。パリサイ人というのはご承知の通り、律
法を重んじ、律法に生きることに、そのことを何よりも第一のことと考えていました。そし
180 てパウロは自分がそのように生きていたときに、律法によってではなく、このナザレ人イ
エスを信じる信仰によって生かされている、そういう人々の群れのあることを見たときに、
自分と相容れない生き方に対し、律法を重んじないその人びとの生き方に対し、これは神
を冒瀆するものだ。自分自身の生き方に相容れない生き方に対して、彼はこれらの生き方
を、それらの人々を殲滅すべきだと考えた、とパウロは書いています。

185 信仰の熱心というものは、宗教家の熱心というものは、往々にしてこういう形を取ると
いうことを、私たちはここに見ることができると思うのです。自分がそのことに対して非
常に熱心であること、そこに生き抜いているとき、自分は自分自身こうすべきであると思
えて、それで自分を律している場合は良いのですけれども、必ずそういう宗教家の熱心と
190 いうものは、それが他者に及んで行くものだと思うのです。そして他者もまた自分とま
たく同じように、かく生きるべきだと考えて、そして自分自身と同じように生きていない
者に対して、いつでもそうすべきであるということにおいて、その人びとを圧迫するとい
うことが起こってくると思うのです。

律法主義あるいは伝統主義、律法に生きるとか、あるいは伝統に生きるということの中
で、人間というものは、だんだんだんだんとその中で、自分がそのように生きていうこと
195 うことで、自分自身が重みを増していってしまいます。そしてそうでない人びとに対して、
パウロ自身が言っていますように、11節のところで「彼らに対してひどく荒れ狂い」と
書いてありますように、人びとを獄に閉じ込め、彼らが殺されるときには賛成の意を表し、
そして自分がひどく荒れ狂ったと書いています。これは実に恐るべきことだと思うのです。
自分自身がかくすべきだ、そしてそれが他者に向かって行ったとき、他者もまた、かく生
200 きるべきだと言って、そのように生きていない人に対してその人は荒々しくなっていく。

他者を切り捨てていく。聖徒を獄に閉じ込め、彼らが殺される時、それに賛成をしたとパウロは言います。

205 そしてそのパウロの熱心は今申しましたように、キリストを信じる聖徒の群れを迫害することにおいてその熱心さが現れました。そしてついに、彼は祭司長たちから権限と委任を受けて、ダマスコに向かって聖徒の群れを迫害するために出かけてまいりました。

210 しかし、そのパウロを天からの強い光が、太陽よりももっと強い光が照り輝いて、パウロ自身をめぐり照らし、そしてパウロは地に倒れたと聖書は記しています。使徒行伝の9章はこのパウロの姿を、聖徒に対する殺意に息を弾ませてダマスコに向かった、と書いています。人に対する、信仰の熱心のゆえに殺意を抱いて迫害に向かったパウロを、十字架につけられ、お甦りになった主イエス・キリストがそのパウロの途上に立ちはだかつて、パウロの行く手を遮られました。パウロはその光のもとに地に打ち倒されたときに、パウロは声を聞きました。

215 サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。(14節)

220 主イエスはここで、ご自分を信じる聖徒の群れが迫害のもとにあるときに、その迫害の中に苦しんでいるその弟子たちを、その聖徒の群れを、サウロに向かって、なぜわたしの信徒の群れを迫害するのか、とお呼びかけにならないで、主は、「なぜわたしを迫害するのか」とサウロに申されました。主を信じる信仰のゆえに厳しい迫害の中に命の危険を冒して、なおその信仰を守り抜いているその人々を、主イエスは「わたし」とお呼びになっておられます。かくまでも迫害のもとにある聖徒の群れの傍らに、主が立っておられる、身を置いてくださる。いやむしろ、もっと主イエス・キリストがその迫害の中にある人々とご自身をひとつにして、「なぜわたしを迫害するのか」とパウロに、サウロに、主イエスは仰せになりました。

225 この言葉を聞いたときに、この光に照らされたときに、サウロは、

主よ、あなたはどなたですか。(15節)

230 と尋ねました。サウロがここで、光の中におられる主イエスを、「主」と呼んでおる、そのことから、ある人びとは、パウロの中に、この劇的なパウロの回心、それに先立って既に、パウロの心の中に主イエス・キリストに対する何か芽生えていたと、そのように推測することができるのではないかと述べています。確かにパウロはそれまで多くのキリスト教徒に触れてまいりました。自分の激しい迫害に、殺意に耐えて、信仰を守り抜いていく。そういう信徒の群れの姿を、彼自身、目の当たり見てまいりました。あのステパノの殉教のときも、サウロは立ち会っていた、と述べていますように。そうした事柄の中で、既に

235 パウロの心の中に、信ずる者の、その信仰に触れながら、何か備えられていたと、そういう推測というもの成り立つのではないかとある人たちは言うのです。

240 確かに、人間が主イエス・キリストの救いにあずかるまでは、それぞれに違った心の旅路というものがあったと思うのです。その長さにおいても、またその姿においても、さまざまであったと思います。ある人は長く、ある人はまことに短い期間に、そうした信仰が

与えられたという経験があると思います。ある人の中にはまことに深い渇きや飢えがあったと思います。しかし、私たちは、パウロ自身が、それでは自分が信仰が与えられる前の自分をどのように見ていたか。そのことを見てみたいと思うのです。

245 ピリピ人への手紙の第3章、311ページ。ピリピ人への手紙の第3章4節から読んでみます。311ページ。

250 もとより、肉の頼みなら、わたしにも無くはない。もし、だれかほかの人が肉を頼みとしていたと言うなら、わたしはそれをもっと頼みとしていた。わたしは8日目に割礼を受けた者、イスラエルの民族に属する者、ベニヤミン族の出身、ヘブライ人の中のヘブライ人、律法の上ではパリサイ人、熱心の点では教会の迫害者、律法の義については落ち度のない者である。しかし、わたしにとって益であったこれらのものを、キリストのゆえに損と思うようになった。(4-7節)

255 と書いてあります。このパウロの言葉を読みますと、パウロ自身が律法の生活を守ることの中で、その律法の持っている高い理想と、そしてその律法を守り得ない自分の無力さというものを嘆いているというような、パウロ自身の中に何か内的な挫折があったというようなことをパウロ自身書いていません。むしろ自分はパリサイ人の中のパリサイ人、熱心の点では教会の迫害者、律法の義については落ち度のない者であったと、パウロ自身書いています。ですから私たちはここで必ずしも、パウロの心の中に既に主イエスを主と呼ぶ

260 ような何か備えが、徐々になされていたというようなことについて、必ずしもそれを重んじる、それを大切に考える必要はない。そういうパウロの心理状態を詮索する必要はまったくくないのではないかと思うのです。

265 そして、むしろここでは、律法の誇りに生きていた、自分は落ち度のない者だと言っていた、あのパウロ自身を、この甦って光の中に現れてくださった主イエス・キリストご自身が、このパウロを地に打ち伏させたということだと思うのです。これはまったく神のみわざがここに現れたということだと思うのです。パウロの場合には、今申しましたように、律法のわざに誇りをさえ持っていたこの熱心なパリサイ人を、教会を迫害することをもって自分の熱心の証しとしていたこのパウロを、主ご自身が捕えてくださったということだ

270 そしてこのことは、先ほども申しましたように、私たち自身がそうでありましたように、主が捕えてくださいますまでに、自分が辿ってまいりました、あの惨めな、あの貧しい、あの暗い、あの渇き、あの苦悩、そうしたものが、主イエスに、私たちを導くものであったというような、そういう経験を私たちはそれぞれに持っていると思うのですけれども、しかしそれとても、私たちの悲慘が、私たちの苦悩が、それ自身、キリストに私たちを出

275 会わせてくださったということではなくって、そういう中にある者に主が出会ってくださった。主がこの私を捕えてくださったということにおいては、まったくこの熱心なパリサイ人パウロを地に打ち倒したように、そこに神のみわざが現れたと同じように、私たち一人ひとりの救いというものはどのひとつをとっても、あり得べからざるところに神のみわざが現れた。それはまったく主の憐み以外にはないと言い得ることができると思うのです。

280 誰をとっても、それは奇跡と言う以外にはないのではないかと思うのです。

そして今、甦られた主は、この自分を迫害する熱心なパリサイ人サウロを捕えて、ご自分のご用のためにお用いになろうとしておられます。

地に倒れているサウロに向かって主は、

285 さあ、起きあがって、自分の足で立ちなさい。(16節)

と仰せになられました。

ここで「立つ」という言葉が使われております。先ほども、エゼキエル書の2章を読みました。預言者エゼキエルの召命の出来事です。その中で主は繰り返し「立ちなさい」。語られております。そしてこの「立つ」という言葉は、主は私たちに、主の使命をお与えになるとき、主の委託をお与えになるとき、この「立ちなさい」、そういう言葉をもって私たちにその課題を、その使命を、その任務を、お与えになる。そういう言葉です。「さあ、立ちなさい」。この「さあ、立ちなさい」というように訳されております「さあ」という言葉は、その通り、今申しましたように、何か命令を与える、そういうときにその前に使われて、「さあ」というように訳されている言葉ですけれども、また別の意味は、「しかし」という言葉です。「しかし、立ちなさい」。

自分の信徒の群れを迫害するパウロの前に立たれた主イエスが、その迫害に対して、報復するためではなく、そのサウロを裁くためではなく、むしろそのサウロを招くために主が、今お立ちになっておられる。サウロ自身、自分が数々加えてきたあの迫害のゆえに、その迫害を加えた主によって打ち砕かれても当然であるべき、そのサウロに向かって、主は報復されるためでもなく、裁くためでもなく、招くために現れてくださった。「しかし、立ちなさい」。

「しかし、立ちなさい」。そう主はパウロに語られました。9章のパウロの回心の出来事を読んでみますと、パウロがこの強い光に当たったときに、目が見えなくなった。その見えなくなった目を、主はアナニアという人に祈りの中に語られまして、サウロの目を開いてやるようにとアナニアにお語りになりました。そのときアナニアは主に向かって、あのサウロという男がどんなに酷いことをしたかということをし上げました。そのとき、アナニアに向かって、主は、しかし、サウロをわたしがわたしの器として選んだのだとアナニアに申されました。サウロに対する人間の評価がどのようなものであっても、主は、しかし、わたしが、わたしの器として、わたしが選んだのだと仰せになられました。そして今、サウロに向かって、打ち倒れているサウロに向かって、わたしはあなたを招くために来たのだ。裁くためではない。立ちなさい。さあ、立ちなさい。そう仰せになってくださいました。

もう一か所開けていただきたい聖書の箇所があります。三二七ページ、テモテへの第一の手紙の第一章一二節。三二七ページ。テモテへの第一の手紙の第一章一二節。

わたしは、自分を強くして下さったわたしたちの主キリスト・イエスに感謝する。主はわたしを忠実な者として、この務に任じて下さったのである。わたしは以前には、神をそしる者、迫害する者、不遜な者であった。(12-13節)

320

そう書いています。ここでパウロが「主はわたしを忠実な者と見て」と書いてありますこの「見て」という言葉は、忠実な者と「見なして」という言葉です。忠実な者と見なしてくださった。忠実な者と考えてくださった。もっと強く言いますと、この言葉は、「信じる」という言葉ですから、「私を忠実な者と、主イエスが信じて、私をこの任に立たせてくださったのだ」とパウロは言っています。

325 人がどのように自分を見ても、そして人よりも何よりも、自分自身が、どんなに恥ずべき、捨てられるべき存在であるかということ、私たちは自分自身が一番良く知っています。しかし、そういう私たちを、主があのパウロを忠実な者と見なしてくださったように、この私たち一人ひとりも、主が忠実な者と見てくださる。そういう者と見なしてくださる。330 そういう者だと主が考えていてくださる。忠実な者だと主が信じてくださる。いったいこの主の憐みのまなざしの中で、私たちは人を恐れることもなく、自分は自分を捨てることはなく、この主が、見なしてくださるそのまなざしの中で、もう一度、確かに、立つことができるのではないかと思うのです。

主がパウロに現れてくださる。「さあ、立ちなさい」。なぜ、わたしはあなたに会ったか。335 なぜ、わたしはあなたに出会ったかということ、わたしがあなたに現れたのは、わたしがあなたを僕とし、証人とするためである。そしてその僕と、証人とせられた者は、自分に主が出会ってくださったこと、そして主がすべての者になしてくださるということ、証しする者として立たせるために、わたしはあなたに出会ったのだ、と主イエスが語られました。あなたをわたしの僕とするために、あなたをわたしの証人とするために、わたしはあなた340 に現れたのだと主が仰せになりました。

そして、興味がありますことに、「さあ、立ちなさい」と言うだけではなく、「さあ、自分の足で立ちなさい」と書いています。自分の足で立つ。そして自分の足で立つということが、このパウロに現れてくださった、主が捕えてくださって、わたしの証人となり、わたしの僕としてくださるために、わたしがあなたに現れたのだとおっしゃるように、私345 たち一人ひとは、主イエス・キリストの僕になるということ、主イエス・キリストの救いのわざを、証しする者として立つということが、とりもなおさず、私たち自身が自分の足で立つということだと聖書が言っています。

私たちの生活の基盤というものが、主が与えてくださった、その目的の中で、その召命の出来事の中で、しっかりと私たちの生きる足場が定まったということだと言うのです。350 自分の足で立つ。私たちは一人ひとり置かれている場所が違っていています。しかし、その違っているところで主イエスは「さあ、そこで、自分の足で立ちなさい。そこであなたはわたしの僕となるのだ」と主が言っておられる。そういうことだと思うのです。

そしてパウロに対して、17節のところで、

355 あなたを救い出し、あらためてあなたを彼らにつかわす。

私たちが生かされるということは、私たちが救い出されて来たその場に、もう一度改めて遣わされることだと言うのです。自分が救われてきた、そこに私たちが改めて、主の証人として、主の僕として、そこに遣わされて行くことだと言うのです。そしてその遣わされて360 行って、何を宣べ伝えるのか。何をするのか。

彼らの目を開き、彼らをやみから光へ、悪魔の支配から神のみもとへ帰らせ、また、彼らが罪のゆるしを得、わたしを信じる信仰によって、聖別された人々に加わるためである。(18節)

365 私たちの目が開ける。今まで見えなかったことが見えてくる。カール・バルトは、このパウロの回心の出来事をこのように書いておられます。「私が立っていた高みとは、深みのことであった。私がその中で生きていた安全さとは、破滅のことであった。私が持っていた光明とは、暗黒のことであった」。自分が律法の誉れの中で、高みに立っていると思った。その高みは、今目が開けて見たときに、それはまことに深い深みの中に自分が落ち込んでいたことであった。私が律法の義によって生きていた安全さというものは、それは破滅のことであった。自分が持っていたあの榮譽、あの光明とは、暗黒のことであった。そしてそのことを、自分の体験をもって知らされたパウロが、今そのことを携えて、自分が救い出された、その光明の中に生きていると信じているもの、安全の中に生きていると信じているもの、高みの中に自分たちは生きているのだと信じている、そういう中に自分自身が

370

375 改めて遣わされて行って、そしてこのことを証しするのだと。そのためにパウロは、今立たされているのだと言うのです。

そして律法の義によるのではなく、私たちのために、十字架に架かってくださり、その甦りによって、そのイエスを信じる、その信仰によって、罪の赦しを得て、そして聖徒の群れの中に、聖徒の交わりの中に入れられたパウロが、そのことを携えて、人びとの中に遣わされて行くというのです。高みが深みであった。安全が破滅であった。光明であったものが、むしろ暗い闇であった。そして新しい光の中に救い入れられたとき、パウロが見ることができた世界っていうものが、そこで新しい世界が開けて来ました。古きは既に過ぎ去った。見よ、新しくなった。あの迫害の中に息を弾ませていたパウロが、聖徒の交わりの中に入れられたと言うのです。

385 ある小さな本で、こういうことを教えられました。この「迫害する」という言葉と、パウロがピリピ書だとか、あるいはコリント人への第一の手紙の14章の1節で、「愛を追い求めなさい。真理を追い求める」という、この愛を「追い求める」という言葉と、「迫害をする」という言葉とはまったく同じ言葉だというのです。改めて教えられて辞書を引いてみました。その通りでした。「迫害をする」という言葉。その言葉と愛を「追い求める」という言葉がまったく同じ言葉が使われている。真理を「追い求める」。それとまったく同じ言葉が使われている。そして、パウロがピリピ書の3章のところで、まだ自分が得たと思っていない、手を伸ばして、それを追い求めているのだと言ったときに、その追い求めるという言葉を使ったとき、そしてまた、コリントの教会に、愛を追い求めなさいという言葉を書き送ったときに、その言葉と、自分があの、教会を迫害してきたというその言葉が

390

395 まったく同じ言葉だということにおいて、自分がどんな者であったかということ、そして光の中に生かされている自分が、今はどのように生かされている者だということを知ったのではないかと思うのです。

そして、そのパウロを主は、忠実な者と見なして、この任に自分を立ててくださったのだという、このパウロの、この主の恩顧の、この顧みの、恐れ多さ。かたじけなさ。そこにパウロは生涯、立ち続けたと思うのです。

400

そして、私たちもまたまことに小さな者です。そして誰よりもまた、自分が欠けの多い、力のない、そしてまことに恥に満ちたものだというのを、伝道においては怠惰であり、愛においても欠ける者であることを、誰よりもよく承知している私たちを、同じようにパウロを忠実な者と見なして、ご自分の使命に立たせてくださった、あの甦りの主が、私たちをもまた忠実な者と見なして、主のご用に、その任に立たせていてくださる。そのことに私たちは堅く立っていきたいと思うのです。

もう何年も前になります。東京におりました頃、教会の大変年を取られました方が、病気が重いということで、病院にお見舞いにまいりました。そうしますと、その病人の枕辺に、聖書が開いたまま置いてありました。何気なくその聖書の箇所を見ましたときに、その開かれている聖書の箇所が使徒行伝であったということに、私は大変驚きを覚えました。自分がもう年を取って重い病の床にあるときに読む聖書の箇所は、ある人にとっては、それが詩篇の詩であるとか、いろいろなところが考えられると思うのですけれども。その人は、読みさしにおいてあった聖書が、使徒行伝であった。使徒行伝は、またの名を「聖霊行伝」というように呼ばれていると言われます。使徒を、名のある使徒も、名のない使徒も、名もない弟子も、小さな者も、この聖霊が揺り動かし、聖霊が働いて、聖霊が立たせ、聖霊が遣わすままに、一人ひとりが主のご用に立った。そして教会のわがが、全世界に広まって行く。その聖霊行伝と言われる使徒行伝を、病の床にある、年老いた一人の婦人が、どういう思いで使徒行伝を読んでいたのだろうか。そのことについては何もご本人から聞く機会はありませんでした。

しかし、もしもそのように想像することが許されるならば、証しをするということは、言葉をもって証しをする。わがをもって証しをする。しかし、それと同時に、その人がそこに遣わされている、そこに置かれている場所で生きているという、存在それ自体がひとつの証しだと思うのです。寝たままに何の伝道ができるのか。そうではなくて、その人が、自分が病床に遣わされている、自分がここに「立ちなさい」と、置かれている場所だと、その人は理解をしていたに違いない。そして聖霊が導くままに、使徒が、弟子たちが、教会が、伝道を押し進めて行く。そのわがの中にこの自分も巻き込まれているのだ。床の中に病んだままに病みながら、床に就きながら、なおそこに自分が生きているのだと、そういう思いで使徒行伝を読んでいたのだと、そう理解して良いのではないか。

私たちもまた、遣わされているところはさまざまです。その力においても、私たちは違っています。何よりも、自分の無力を嘆かなければならない私たちは、「しかし、自分の足で立ちなさい」、そうパウロを立たしめてくださった主が、今私たち一人ひとりに同じ言葉を語りかけていてくださる。忠実な者と見なしていてくださる。その主のまなざしの中で、もう一度新しく立って、私たちが遣わされるところに、出て行きたいと思えます。

お祈りをいたします。

父なる神さま。闇の中にいながら、本当に自分の闇の姿が分からなかったときに、あなたは、この取るに足りない小さな者を、あなたのみ心に留めてくださり、あの主イエス・キリストの贖いとその甦りのわがを通して、私たちを救い出し、悪の力から神のもとに、闇の世界から光の世界へと移し変えてくださりました。そして繰り返し犯します罪にもかかわらず、なお主はその赦しと憐みのゆえに、私たちをご用のために立たせてくださいま

すことを感謝いたします。どうぞ一人ひとりが、そしてこの教会が、その主の顧みの中にしっかりと立つことができますように。

主イエス・キリストのみ名によってお祈りいたします。アーメン。

445 さゆり先生：讃美歌の502番。

さゆり先生：(祝福) 主イエス・キリストの恵みと、神の愛と、聖霊の交わりとが、あなたがた一同とともにあるように。アーメン

450 オルガン：後奏